

日本音楽教育メディア学会
(JAPANESE MEDIA SOCIETY FOR MUSICAL EDUCATION)

JMSME News Letter

2026.1 vol.22

発行:令和8年1月15日
日本音楽教育メディア学会事務局
〒125-0062 葛飾区青戸 5-5-16
jmsmeoffice@gmail.com
ホームページ
<https://jmsme.org/>

ご挨拶

会長 飯泉祐美子



新年あけましておめでとうございます。

日本音楽教育メディア学会の会員の皆さまにおかれましては、新たな年を健やかに迎えのこととお慶び申し上げます。

日頃より本学会の活動に多大なるご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

さて、近年の音楽教育の現場では、タブレット端末を用いた楽譜や教材が急速に普及しつつあります。従来の紙の楽譜に代わり、クラウド上で管理された楽譜を共有したり、演奏中にページめくりを行ったりする光景は、もはや珍しいものではなくなりました。これらの変化は、単なる利便性の向上にとどまらず、音楽の学び方そのものを変えつつあるように思われ、私達音楽教育に臨む者の取り組むべき課題のひとつであるともいえます。

紙の楽譜には、書き込みのしやすさや、長年使い込むことで愛着がうまれます。一方、デジタル楽譜は、音源や動画と結びつけた学習がしやすく、新しい学びの形を可能にしています。デジタル楽譜は、ペーパーレス化として環境負荷の低減という観点からも重要な意味を持ちますが、音楽教育の現場においては、機器の操作、著作権やデータ管理の問題など、私たちが慎重に検討すべき課題も少なくありません。

本学会が扱う「音楽教育」×「メディア」は、まさにこのような変化の過渡期にあります。技術が進歩するほど、教育の本質や音楽の意味をあらためて問い直すことも重要になるでしょう。

本年も研究会やニュースレター等を通じて、会員の皆さまと活発な情報交流を深めてまいりたいと存じます。皆さまのご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げ、新年のご挨拶といたします。

令和8年 新春



日本音楽教育メディア学会 第22回研究会のご案内

日時：2026年2月23日（月・祝）

場所：葛飾シンフォニーヒルズ 別館 4階 ライラック

13:00 開会 会長挨拶

13:05～15:10 口頭発表

15:20～16:20 **アフタヌーンティー** 

（お茶を飲みながらお話ししませんか？）

会場とオンライン（Zoom）でのハイブリッド開催となります

参加費：会員無料 非会員 1,000円（事務局に参加お申し込みください）

17:00～懇親会（青砥駅周辺予定）

事務局：jmsmeoffice@gmail.com



【口頭発表】（発表20分、質疑応答10分）

13:05 「ハワイ州における多文化音楽教育の諸相-教員養成課程と小学校音楽科教育を中心に-」
後藤友香理（静岡大学）

13:35 「ラジオ番組『ABC こどもの歌』と新しい童謡」
葉口 英子（ノートルダム清心女子大学）

14:10 「メディアの中に見る遠州波小僧伝承-書籍・記事・校歌の分析から-」
兼古勝史（放送大学）、大門信也（関西大学）、箕浦一哉（山梨県立大学）

14:40 「学生の興味を喚起する音楽理論コンテンツについて」
小林田鶴子（神戸女子大学）

休憩

【アフタヌーンティ】 15:20～16:20



会費納入のお願い

2025年度（2025年8月1日～2026年7月31日）の年会費の納入をよろしくお願いいたします。

《振込先》 ゆうちょ銀行 10510-91267401

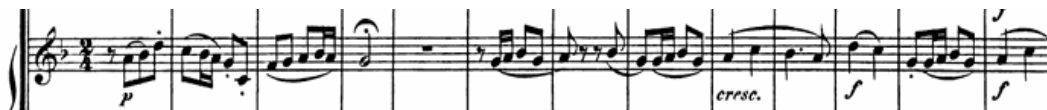
他銀行よりお振込みいただく場合：店名〇五八（読みゼロゴウハチ） 店番 058（普）9126740

ニホンオンガクキョウイクメディアガッカイ



近代西洋音楽がその礎としている24の調性には、各々固有の性格があるとする調性論。それを検証しながら進めているこの連載では、題材にシューマンの『ユーゲントアルバム』op. 68を取り上げ、今回の第4回では、43曲中5曲あるヘ長調を取り上げる。

ヘ長調の楽曲といえば、誰しも直ぐにベートーヴェンの交響曲第6番「田園」を思い浮かべるのではないだろうか。各楽章に自ら標題を施したベートーヴェン。第1楽章の「田舎に到着したときの晴れやかな気分」、第2楽章の「小川のほとりの情景」、第3楽章の「農夫達の楽しい集い」、第4楽章の「雷雨、嵐」、そして第5楽章の「牧歌 嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」。これらの言葉からも、ヘ長調の性格、すなわち自然の持つ解放感や安らかさ、自然に対する畏敬の念が読み取れる。



鍵盤楽器の為の作品ではJ. S. バッハの平均律第2巻第11番のプレリュードに、静に流れる小川のような自然の風景が聴き取れる。



またショパンの練習曲作品10-8でも、同じような音型を用いた爽快なパッセージが早春の候を思わせる。



それではR. シューマンの『ユーゲントアルバム』では何が起きているだろうか。 第7番「狩人の歌」ではその題名の通り、いき

いきとしたホルンの響きを思わせる旋律が奏でられ、第10番「楽しい農夫」では、左手の旋律がのびのびとした安心感を思わせる。どちらにも、frisch(新鮮な、はつらつとした)とfröhlich(楽しい、陽気な)の表情指示があることにも注目できる。



だが第26番と第30番には標題が付いておらず、音楽と言葉の指示から汲み取るに、落ち着いたやや遅めのテンポで可愛らしく、また、たっぷりと歌わせて演奏されるのが好ましい。



第42番の「装飾されたコラール」も、穏やかな流れの中に祈りをささげるような旋律が隠されている。



21世紀も四半世紀を終え、もはや21世紀生まれの保育者や教員がその現場に立ち、若手として活躍している時代となった。

そこで、第17回は21世紀のこどものうたについて扱ってみたいと思う。

—2001年から2005年のこどものうた—

21世紀の幕開けとともに、子どもたちを取り巻く音楽環境も大きな転換期を迎えた。2001年から2005年にかけてのこどものうたを振り返ると、その変化の兆しがわかりやすい。テレビ番組『おかあさんといっしょ』を中心とした従来の「うたのお兄さん・お姉さん」が歌う楽曲は依然として子ども文化の核にありながらも、リズムやその織りなすサウンドがそれまでとは変化してきた。

この頃のこどものうたは、ポップスやダンスミュージックの影響がより濃くなり、アップテンポで体を動かしやすい曲が増え、保育現場でも「踊る」ことを前提とした楽曲が好まれるようになった。身体表現と一体化した歌は、音楽を聴くというより「身体で感じる」体験として子どもたちに受け入れられていった。

また、歌詞にも変化があった。ややくだけた言葉を用いた歌詞や、不自然な切れ目の歌詞、繰り返しの多いフレーズが増えた。

この時期のこどものうたは、保育園、幼稚園、そしてメディアでは主にテレビ、CD、DVDであったため、それらに触れる時間については現在と異なり、一定の場面や状況の制約があった。

さて、そのころ、間もなく訪れる、いつでもどこでも場面制約なく触れることができる時代をどれほどの人たちが予想していたのだろうか？

《会員メッセージ》

後藤友香理（静岡大学）

勤務先の長期研修制度を利用し、今年度の8月から12月までハワイ大学、1月から3月まで桐朋学園大学で客員研究員としてお世話になる機会に恵まれました。この原稿を書いている今（12月）は、ハワイでの5か月間が終わろうとしているところです。ハワイは初めて訪れる土地でしたが、実際に暮らしてみるとガイドブックで知る観光地としてのハワイとも、そしてアメリカ本土ともまた違う、ユニークな文化を持つハワイの姿を体感しています。

ハワイは、「マジョリティ・マイノリティ州（白人が多数を占めない州）」の一つであり、他のどの州よりも人種・民族の多様性が際立っています。ネイティブ・ハワイアンやほかの太平洋諸島系の人々、アジア系（日系、中華系、フィリピン系など）、白人、さらにそれらの混血の人々も多いため、相手の肌が何色なのか、ということ在日常においてあまり意識することのない、稀有な場所だと思います。



箏を演奏するハワイ大学の学生たち

当然ハワイの音楽文化も多様であり、クラシックやジャズなどの音楽、ハワイの伝統音楽、日本やアジアの音楽など様々な地域の音楽が実践、伝承されています。音楽教育においてもそれは同じで、アメリカのこどもの歌はもちろんですが、それと同じくらいハワイ語の歌、日本の歌、中国の歌、アフリカの歌など世界中の歌が教材として用いられ、子どもたちが自然に歌っていました。このようなハワイの音楽文化や音楽教育について、今後も研究を深めていければと考えています。

私は現在、小学校に勤務しながら、「音楽科教育におけるテクノロジー活用」をテーマに博士論文の執筆に取り組んでいます。日中は、好奇心旺盛で元気いっぱいの子どもたちと向き合い、夜は静かに文献とデータに向き合う日々です。現場での気付きは理論を豊かにし、研究を通して見出された問いは翌日の授業の視点を少しだけ変えてくれます。忙しい毎日ですが、このような教育と研究の往復が、私自身の学びを更新し続けています。

昨今、テクノロジーの急速な進化によって私たちの生活は様変わりし、学校教育も大きな転換点を迎えています。音楽科授業においてテクノロジーをいかに活用するのか、或いは活用しないのかを問うことは、AI 時代において重要な論点であると捉えています。また、コンピュータがスピーディかつ大量に音楽を生成するこの世の中においては、単にそれを享受するだけでなく、自身で価値判断したり再構成したりする力がますます重要となり、学校教育においてもそうした時代を想定した授業づくりが求められるのではないのでしょうか。

本学会の会員の皆さまから多くの示唆をいただきながら、今後、学校現場に還元可能な知見の提示と、音楽教育研究の発展に資する発信ができるよう努めてまいります。

「22 年間の卒業論文指導を終えて」

小林田鶴子（神戸女子大学）

先日、私の最後のゼミ生 5 人の卒業論文（以下「卒論」）指導、審査を終えた。今年 3 月で専任教員の定年を迎える為である。私の勤務そのものは、来年度も特任教授として残ることになったが、大学の規定で、定年後はゼミを担当しないことになっているからである。

教育学部では免許取得を目的として入学する学生も多いが、ゼミ説明会の時には「免許や資格取得だけなら専門学校でも可能だが、大学は卒論を書くことが大切なのだ」と話すようにしていた。「レジャー施設化している」と言われて久しい昨今の大学は、卒論が卒業必修単位になっていることで、かろうじて研究機関としての面目を保っているように思う。

私のゼミは「音楽ゼミ」で、研究内容は「創造的音楽学習、音楽と ICT、サウンドエデュケーション」を主に挙げているが、論文テーマ決定の際はまず学生本人のやりたいことを聞いてそこから出発していくので、その範囲は多岐に亘っている。

因みに今回の卒論に取り上げられた内容は「世界の三大音楽教育」「アメリカの教育を取り入れた日本での音楽科教育」「モンテッソーリ、シュタイナー、レッジョエミリア、ピラミーデ」で、あとの 2 本は「音・音楽を扱った絵本」「絵本におけるオノマトペの分析」である。

いずれ、これまでの卒論のまとめを行おうと考えているが、印象に残っているのは、名古屋女子大学で造形の先生に指導を頂いて、幼児の手押し車「カタカタ」を実際に作成したことや、名古屋市営地下鉄の到着メロディを分析して、改良メロディをパソコンで作成したものがある。次の共栄大学では、大学内のサウンドマップを作ったり、竹の音具でワークショップを行ったりしたものがある。本学では、乳児のベッドに取り付けるオルゴールメリーに使われている曲の分析をメーカーごとに行い、そこで取り上げたメーカーに実際に就職したという例や、在学中に結婚・出産し、我が子を「実験台」にして乳児が泣き止む音楽について行った研究がある。

卒論を書くことによって、学生の音楽観・教育観が変化したということもあるが、何よりも私自身が学生の若い感性に刺激されたり、学ばされたことが多くある。

22 年間、指導したゼミ生はおそらく 150 人近くになると思うが、この学生達に感謝すると同時に、彼女、彼らが人生のどこかで、卒論執筆で頑張った日々の記憶が前に踏み出す一歩となることを願ってやまない。

事務局だより 2026 年が幕を開けました。本年は午年（うまどし）ですね。皆様にとって、うま年らしく軽やかで力強い一年にしたいですね。事務局一同、お力添えできるよう進んでいく所存です。本学会の研究会は、対面、オンラインのハイブリッド開催となります。どうぞお気軽にご参加くださり会員同士の情報共有の場としてご活用ください。2026 年が皆様にとって、さらなる飛躍を遂げる素晴らしい年となりますよう心よりお祈り申し上げます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。